



TITLE:

(随想)最近の尿路結核

AUTHOR(S):

百瀬, 剛一

CITATION:

百瀬, 剛一. (随想)最近の尿路結核. 泌尿器科紀要 1958, 4(3): 115-116

ISSUE DATE:

1958-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/111586>

RIGHT:

泌尿器科紀要

第 4 卷 第 3 号

昭和 33 年 3 月

随 想

最近の尿路結核

千葉大学医学部 助教授 百 瀬 剛 一

私は昭和15—32年に吾々の外来を訪れた尿路結核患者を調査したが、最近の尿路結核に就て特に感じた2, 3の事項を記述してみよう。

第1は化学薬剤の濫用が診断面に及ぼした影響であり、結核の化学療法の普及と共に泌尿器科領域に於ても往時泌尿器科手術の王座を占めた結核腎剔除術が年々減少の傾向を示す様である。果して尿路結核者が減少しているかに就ては、我国尿路結核者の適当な統計がないので正確な事はいえないが、少くとも泌尿器科専門医の取扱う患者数の減少、特に尿路結核の3大症候といわれる頻尿・排尿痛・尿濁を主訴として来院する者が激減した事は事実の様である。

しかし膀胱炎症状のため、既往に医師或は薬局より化学薬剤の投与をうけたものが来院し、尿・膀胱所見に全く結核性病変を認めぬに拘らず腎盂・尿管撮影法により腎結核を発見する事は稀でなく、往々にして末期腎結核、或はかつて比較的稀有とされた閉鎖乃至閉塞性結核腎、漆灰腎等を見出す事も少くない。吾々の教室では昭和32年の1年間に斯様な症例中に漆灰腎3例、閉鎖乃至閉塞性結核腎7例を経験し、又昭和30, 31, 32年の3年間に来院した尿路結核者中、その主要症状並に結核膀胱像を示すものと、膀胱結核の病像を欠くものとを比較すると、その割合は3:7に近く、非定型的病像を示すものが遙かに多い。即ち成書に記載されたが如き尿路結核の病状をもつて来院するものが近時著しく減少している傾向がある。

之等非定型的症例を検すると、多くは膀胱症状を以て医師或は薬局を訪れサルファ剤、ペニシリンをはじめ種々の抗生剤を投与され、次で結核化学薬剤が使用され自覚症状が消失したもので、この間特に泌尿器科専門医の診察をうけたものは皆無に近い。稀に尿検査が行われ、結核菌の存在を指摘されても何等専門的診察は施行されず、医師により十年一日の如く長期にわたり投薬が継続されていたものである。

尿路結核、特に膀胱結核の化学療法が著しい効果を發揮する事は衆知の事実であり、したがって膀胱症状を前景にあらわす尿路結核が斯様な療法によつても症状の改善、即ち所謂見かけの治癒を営む事は当然であり、患者は之を全治と判断し、たとえ膀胱症状が再発しても進んで専門医を受診する事なく再び化学療法のみ依存する傾向がある。偶々吾々が斯様な症例を発見し、尿路結核の病態を説明の上、観血的療法の適応なるを力説しても現在無症状なるが故に之を肯じないものが少くない。

一方化学療法により見かけの治療状態にあるものは、専門医に於ても尿及び膀胱鏡検査の

みでは多分に腎結核の存在を見落すおそれがあり、私も嘗て斯様な症例を非結核性膀胱炎と見做し、後日腎盂尿管撮影法により腎結核の診断を下し得た症例が2、3にとどまらない。

私は近時膀胱炎患者の診察にあつては、先ず既往における化学療法、特に結核に対するその実施の有無を問診し、その詳細不明のものは、たとえ尿・膀胱鏡検査により非結核性と診断せられるものでも上部尿路検査を実施する事を原則としている。かくして時に意外の症例に腎結核の存在を発見する事を経験した。

従来頑症と見做され、殆んど専門医の治療にゆだねられた尿路結核も、近時一般医は勿論、甚だしきは薬局の投薬によつても自覚症の消失を来し見かけの治癒にいたるがために、患者も満足し、兎かく敬遠され勝な泌尿器専門医を訪れるもの、或は自覚症消失のため観血的療法を積極的に希望するものが減少し、更に化学療法によつて見かけの治癒状態にあるものは、時に専門医によつても誤診せらるる所から、之等は何れも近時尿路結核が減少せりとの現象に一役を演じているものと考え、現在化学薬剤の濫用に基く陰蔽せられた尿路結核の症例はかなり多数にのぼるのではないかと思う。

私は薬局は勿論、医師に於ても単に患者の主訴或は希望に基く営利的な化学薬剤の投与をつつし、医師は如何なる場合にあつても尿路結核の確診、患側腎の決定及び其病変程度の確認後はじめて化学療法を実施すべきものと信ずる。一度び化学療法を行えば尿路結核の診断は不確定となり、時に患側腎の決定すら困難となり、ひいては患者の予後に重大な影響をあたえるものであろう。

第2は化学薬剤の尿路結核の病態に及ぼす影響であり、私の資料中結核化学療法が普及したと見做される昭和25年以後の症例の年齢・性別其他に就て昭和25年以前のそれと比較すると、年齢に於ては、化学療法普及後小児症例が激減し、比較的老人例が増加した感がある。小児例の減少は、小児結核の予防乃至化学療法を主とするその治療対策の進歩に基くものと思われ、老人例の増加は、嘗ては他臓器結核、特に胸部結核等により当然死亡すべきものが化学療法の出現により生存可能となつたためと思われる。最近本邦の胸部結核の発生年齢が従来よりやや高令にづれているといわれるが、私の資料の老人例の増加は或はその一端を示すものではないか考える。

男女の尿路結核罹患率は一般に男子の方が高率であり、腎剔除後の予後も男子の方が不良とされ、この差異を男女生活状態、體質的の差異に求めているが、私の化学療法普及後の症例では男女罹患率が著しく接近し、腎剔除後の予後も、その観察期が稍々短い嫌いはあるが、両者の間に著しい差異は認め難い様である。私は之に化学療法が何等かの役割を演じたものであるかと思う。

患腎の病理学的所見は、化学薬剤の作用機序から当然の事であろうが、既に記述した如く近時閉鎖乃至閉塞性結核腎、漆灰腎を多く経験する事は興味がある。

最後に、腎剔除後の膿瘍或は瘻孔形成の問題は、往時かなりの頻度に発現し、その原因として残存尿管の処置等が論ぜられたが、近時手術に化学療法を併用する事により術後の経過は甚だ良好となり膿瘍・瘻孔形成を見る事は稀となつた。しかし術後全く順調に経過したものが1—3年の長期を経て膿瘍形成を主訴として来院したものが数例の多きに達している事は注目し値する。おそらく術後惹起した化膿も化学療法によつて抑制され、限局性無菌的膿瘍となり長期にわたり静止の状態にあつたが何等かの原因により身体抵抗の失調を来し膿瘍は動的となり症状発現をみたものである。

以上私は我々外来を訪れた症例をもととして化学療法が尿路結核に影響を与えたと思われる事項を調査したが、化学薬剤は尿路結核のあらゆる面に功罪相半する影響を及ぼし、その臨床像は往時とかなり異つた様相を呈するにいたつている。したがつてその診断並に治療に當つては深甚な注意を以て対処すべきものと信じている。